

イエスとマルタとの対話の結びは、「しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない(ルカ 10:42)」。

誰もが知っている場面で、吾身を省みて教訓にする箇所。イエス御一行様に奉仕するマルタ(10:40)、教えにじっと聞き入るマリア(10:39)。能動と受動、アウトプットとインプットで対照的。

私たちは戯れに、マルタ型かマリア型かと言い合ったりするが、実際これらはその人の内で複合している。だが単純に、どちらの型かに納めて妙に納得する。

美穂姉の葬儀で読んだ彼女指定の聖句「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる(マタイ 6:33)」。

このイエスの言葉はいわばマリア型で、「必要なことただ一つ(ルカ 10:42)」を求めれば、必要なもの(マタイ 6:32)は「みな加えて与えられる(6:33)」。

美穂姉にはキリストの言葉が生きていて、マリアのように祈り、マルタのように難なく行動する人だった。マルタかマリアか、どちらか一方ではない。「何よりもまず、神の国と神の義を求める(6:33)」なら(マタイ)、求める者は自ずと突き動かされて(マルタ)、必要なものは加えて与えられるだろう(6:33)。

多くのことに思い悩み、心を乱し、必要なただ一つのことを忘れていたマルタ(ルカ 10:41~42)。マルタは率直な姉妹マリアに否定的な感情を持ち(10:40)、マリアを勝手にさせておくイエスにまで苦情を言っている(10:40)。

マルタは責任を果たそうとして、必要なことただ一つ(10:42)を聞き逃している自分に苛立っていた。こんなマルタへの、イエスのまなざしと言葉は慈愛に満ちている。「マルタ、マルタ(10:41)」とくり返し名を呼び、「マルタの本来」を「マルタの奥の間」から呼び出している。

マルタのごとく、私たちは何かに思い悩み、心を乱すことがある(10:41)。その要因は個々の人生において千差万別、枚挙にいとまない。教会内の奉仕に限っても、マルタのような思い悩みは数多あるだろう。

八ヶ岳伝道所は「決まり事はできる限り作らない」という方針でやっているけれども、それにしたって「マルタ病」には罹患する。そんな私たちに、イエスは優しく、静かに語りかけて来る。

「マルタ、マルタよ(10:41)」と個別に名を呼び、奥の間に閉じ籠っているその人を呼び出す。

「必要なことはただ一つだけ(10:42)」とは何か。「主の足もとに座って、その話に聞き入る(10:39)」こと。

命も、恵みも、御言葉も、何よりもまずキリストが与えて下さっている。マルタは得ていながら見失っていたが、名を呼ばれることで「必要なことただ一つ」を掴み直して己自身を回復させたであろう。

「わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす(詩編 42:5)」。「魂=nephesh」とは、心とも命とも自我とも訳せる。すなわち「私という全存在」を、「神の家に入り、ひれ伏すこと(42:5)」へ「注ぎ出す」のだ。

思い煩いは、人間の都合のいい一部分だけが求められるゆえに起こる。会社では稼ぐ能力、集団では協調する能力、家庭でも各々の役割。「私」は分割され、「全存在」などかえって迷惑がられる。

マルタは奉仕するという責任感で自己を分割し「心を乱していた(ルカ 10:41)」。マリアは「無責任」を含んだ己が全存在をイエスに「注ぎ出していた」。これが「必要なことただ一つ(10:42)」。

全存在を注ぎ出すには、罪をも含んだ私を受けとめてくれる器が必要。それは、私の名を呼んで下さる方。



《おまけのひとこと》

見せたい私は玄関脇の居間にいる 見せたくない私は息をひそめ奥の間にいる 居間の私は世に差し出されている 奥の間の私は頑固で疑い深い この明暗コントラストを キリストは然りとする